

銅鑼

銅鑼は、主に茶道（茶の湯）で使われる小型の金属製の鉦（かね）である。銅、錫、鉛、銀を慎重に配合した「砂張（さはり）」と呼ばれる合金で作られる。これらの金属のバランスで銅鑼特有の響きを作り出し、個々の銅鑼の大きさや厚みで音程や音色を決定する。

さまざまな金属製で作られた銅鑼が、アジア大陸を経由して日本に伝わったが、その起源はジャワ島やスマトラ島などの南方系の打楽器であった可能性がある。もともとは芸能の楽器として、また軍事作戦や船の出航などの合図に使われていた。15世紀から16世紀にかけて茶会が社会的、美的実践として発展するにつれ、銅鑼は亭主が参加者に茶室に入る時間を知らせる手段として取り入れられるようになった。低く、長く続く残響音は、集まりにふさわしい瞑想的な音色をもたらすことを意図していた。今日でも、銅鑼はすべての近代的な流派のお茶にとって不可欠な道具である。

銅鑼はロストワックス製法で作られている。まず、粘土と粃殻を混ぜたもので土台となる形を作る。粃殻は焼くと灰になり、鑄造時にガスが抜けるように小さな穴が開く。その上に、粘土と砂を混ぜた"真土"を何層にも重ね、木型で形を整え、鉦の形にならす。乾燥後、さらに真土を削り、質感や装飾を加えることもできるが、これは完成品の音色にも影響する。ベースと真土を合わせたものが、鑄型の下半分になる。蠟の層が彫られたくぼみに押し込まれ、粘土と粃殻の層が型を完成させる。鑄型全体を加熱すると、蠟の層が抜け、鉦の形の空洞ができ、そこに溶けた砂張を流し込む。

1時間ほど冷やした後、型を丁寧に削り取ると、中の銅鑼が現れる。職人が磨き、時には鎚で叩いて仕上げる。完成した銅鑼は、木製の枠に掛けられる。

1955年、銅鑼は重要無形文化財に指定された。同年、石川県出身の初代・魚住為楽（1886-1964）が、銅鑼作りの技術で重要無形文化財保持者に認定された。2002年には孫の三代・魚住為楽（1937-）も技術保持者に認定された。石川県立美術館には、魚住家の銅鑼をはじめとする金工品が収蔵されている。